二〇二〇年一月二二日（参加者一七名）

大とんど斯く高きまで灰神楽　うつぎ
香焚いて笑まふ遺影と冬籠　うつぎ
大とんど灰を巻き上ぐつむじ風　うつぎ
百幹の竹爆ぜに爆ぜとんど急　うつぎ
とんど果て端山の朝日高きかな　うつぎ
東雲の月へ高舞ふとんど灰　よう子
海藻の七草粥よ海女の宿　よう子
小走りに来てお飾りを焚く農婦　よう子
火伏せ棒振るとんど守仁王めく　よう子
真青なる空の展けてとんど果つ　小袖
大とんど真向ふ山に朝日出づ　小袖
とんど灰地に渦巻くもありにけり　小袖
靴跡の片方向に霜の橋　かつのり
裸木のしるき影敷く陽射しかな　かつのり
街灯の舌に易者の着膨れて　素秀
のど飴を口にまろばせ初大師　素秀
鷺一羽池の真中に凍てにけり　満天
寒晴の日射しを洗ふ堰の水　満天

あれこれとネール試して春を待つ　もとこ
冬凪に真珠筏の展けけり　もとこ
阪神忌遠汽笛して潮曇り　よし子
葉牡丹の箍のゆるびや小正月　よし子
河川敷クレーターめくとんど跡　こすもす
初神楽四方へ弧を描く湯玉かな　たか子
初鏡左右対称たしかめて　なおこ
松の秀を過る白雲初御空　菜々
夙川の春を呼ぶやに奏でけり　はく子
冬枯の谷ふところに一山家　ぽんこ
ながらへし母と言祝ぐ初明り　わかば

定例句会みのる選

二〇二〇年一月二二日（参加者一七名）